

終末期医療における自己決定（権）のあり方の考察

生と死の境界をある程度コントロールできるようになり、人生 100 年時代と呼ばれる現代では、老後の過ごし方だけではなく自らの人生のあり方について明確にする必要性が大きくなっている。

自分の望んだ最期を迎えられるよう、日本も死の自己決定にまつわる議論を深めていく必要があるが、日本においては個人の意思の尊重が受け入れがたい状況である。そこで、終末期における自己決定が認めづらい現状は、日本人の国民性や死生観が関係しているのではないかと問いをたてた。

日本人は古来より死を重要なものと位置づけ、死を遠ざけつつも正面から向き合った上で儀礼を行い、精神的にはその人があたかも生き続けているかのように扱う。その一方で、日本の伝統的な家族関係故の精神的距離の近さから、亡くなる前に自分や家族の死についての議論をすることがタブー視されているというのが現実である。しかし、死は平等に訪れる。自分自身にとっての「よき死」とは何か。己の尊厳を守るためにも、深い思考を伴った対話を自分自身や家族と行うことが必要である。

そこで、筆者は個人の死に纏わる意思表示をタブー視しないために、規則や法律を制定し、意思表示を行う機会を制度化するのが望ましいのではないかと考えた。また、この制度に加えて心に根ざした日本の文化的土壌を守るのと同時に、オランダのように文化と現代的価値観を融合し、これらの調和を目指すのが重要であるという結論に至った。